域中心都市仙台の発展と周辺農村部の都市化の様態″をテーマに，3日間で行われた．その概要を以下に示していきたい．

まず，6日に仙台駅へ集合し，駅前ビルより市街を展望した後，繁華街を通り，県庁・市役所でヒアリングを行った．

ここで，私達は，東北地方とはどういう所か，また，宮城県の中で，仙台市はいったいどのように位置付けられ，現在，どのように機能しているかを知ることができた．その後，東北歴史資料館，および多賀城跡を訪れた後，泉ニュータウンでヒアリングを行った．

短時間で，バス移動ではあったが，車中では，絶えず先生がいろいろな説明をして下さったおかげで，私達は，仙台の歴史や，現在，流通業を基調として，どのように躍進しているかを，じかに知ることができた．

最終日の8日は，午前中，仙台市のベッドタウンと言われる泉市市役所を訪れ，ヒアリングをした．

午後からはグループに別れ，近郊の農村を訪れ，実際に土地の方々と話をする機会を得た．

仙台市は，広瀬川周辺に形成された広大な河岸段丘上に位置し，多賀城（現在，多賀城市）の存在が示す如く，古代より東北地方の中心的役割を果たしてきた．

江戸時代の大大名伊達氏による集積を基に，現在でも第三次産業が目まぐるしく発達しており，流通の分野においては東北地方の中心である．というのは，東北地方には中心となる都市がなく，群雄割拠の状態にあり，それぞれの目が東京へと注がれているからである．

従って，仙台市は，流通の面においても，又，政府の出先機関が集中しているために，行政の面においても，東北の中心足り得るが，工業集積の基盤がないために，東北全体の中心には成り得ないのである．こうした中で，今，仙台市を中心にした仙台広域都市圏の計画が進められている．

これは，土地利用を再検当し，編成し直して，多くの人々が，近代的・文化的生活を営めるようにするものである．多くの人が集まれば，資本も豊かになり，広範囲にわたれば，それだけ都市計画も行い易いのであろう．

6月には東北新幹線も開通し，様々なインパクトが予想されている．その中でも，東京に包含されるか否かは，いろいろ論議を呼んでいるが，これからの仙台の広域都市圏としての発展に期待したい．

（9月6日～8日　井内教官指導）

青　梅　巡　検

宇　井　真理子

中学・高校と，地理という教科に触れてはきた私だが，質量ともに大きく異なる大学での学問として地理を学び始めて，最も戸惑いを感じたのがこの巡検だった．遠足に毛のはえたようなものかしらと，前知識も不十分に出かけたのが，最初の青梅巡検である．夏休み明けのことで，年も変わった今振り返ってみても記憶はおぼろである．青梅に対しては有名なマラソンレースがあるくらいの認識しかなかった私は，青梅が関東の大切な水源のひとつであること，古くからの織物の産地であることを知った．知り得た知識は足をひきずった割にわずかなものであったかもしれない．しかし実際に現地へ赴き，土地の人々に接することによって得るものは，本を読んで詳細な知識を得ることとは別の意義があるであろう．織物に関して工場や事務所で受けた説明は，申し訳ないことだがきれいに頭から消えてしまっている．だがオートメ化の進んだタオル製造工場を見た後で訪ね

た昔ながらの女工員の手による織物工場の労働環境の劣悪さは，いまだに私の目に焼きついている．薄暗い小さな工場の中に鳴り響く機械の轟音に私は耐えられず表へ出てしまった．実地調査において体で感じた問題意識を明確にして掘り下げていくことができれば，巡検の意義も見えてくるのではないだろうか．またそれによってこれから地理学を専攻していく為の気構えが固められればと思う．

（9月7日　内藤教官指導）

木更津・館山巡検

蓮　尾　順　子

10月1日，2日と式先生指導の下，2年生4回目の巡検が木更津・館山で行なわれた．10月1日木更津に到着した私達は，房総の地形の見所として，砂洲の列・穿入蛇行・成田層の台地・湾奥砂洲の説明を受けたあと，県立上総博物館を訪れ，房総の歴史・文化の概要をつかんだ．房総は，古代から三浦半島（鎌倉）との結び付きが強く，また開発も早かったという．博物館内では，開発に関連して幾つかの水利技術（上総堀り・横井戸マンボウ・川廻し）に触れることができた．昼食後今度は木更津駅から南東方向に進んだ林道付近で露頭を観察する．かつて矢那川に刻まれた河床が地盤隆起によって陸地に現れて形成されたという段丘が，黄色を呈する東京パミス層，一列に規則正しく並んだ段丘礫，あるいは地質の違いを手掛かりとして，露頭の中に，はっきりと見て取られた．

翌10月2日は拠点を館山に移した．前日とはうってかわったような雨空の下，朝食後の散歩も兼ねてまず沼のサンゴ層の観察に出かける．開析した谷が縄文海進で溺れ谷を形成し，水が引いたのちも埋積低地としてその名残りをとどめる中に，サンゴのかけらが点在する．縄文海進は5m程度であったにも関わらず，海抜15m付近でも露頭観察が可能なのは，その後の房総半島の隆起によるのだそうだ．一旦，館山寮に戻ったのち今度はバスで洲崎をまわり平砂浦に到着．sandスキー場を見学．これは，浜堤の砂が冬の西風によって第3系丘陵地（三浦層群）に吹き上げられたために内陸に形成されたものである．再びバスに乗って，相浜・布良の2つの漁業協同組合を訪れる．他の例にもれず，ここでも兼業化・高齢化が進行しており，そのため高級魚志向が強いということであった．昼食後，徒歩で安房神社へ．房総文化発祥の地とされる神社内には，縄文海進時に形成された海食洞と思われる先住民の洞穴があり，内部では人骨・土器・貝塚が発見されている．

バスで野島崎にまわり，海岸沿いを散策する．関東地震の際形成された隆起波食台を観察するが，やや沖の方へ傾いている．この頃，雨が本降りとなったため，長尾川の穿入蛇行観察は断念し，一同，予定より早い帰路につくこととなった．

今回の巡検では房総半島の地形の随所に地盤隆起の痕跡が見られたことが強く印象に残っている．この隆起が将来も同じスケールで続いた場合，房総半島の地形はどのような変形をうけることになるのであろうか．不安定な地塊の上で生活を営んでいる人間の小ささ，危なっかしさというようなものを痛感せずにはいられなかった．

（10月1日～2日　式教官指導）